


監督・撮影・編集 I 松井至

ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ I CHARLOTTE COOK　支援 I FIELD OF VISION

出演 I 矢部佳宏 矢部幸子 小椋サカコ 小椋ユアコ 宮澤一一 宮澤恭子 矢部タミ 石井アツ子 荒海享俊

矢部隆一 三瓶トミノ 音楽 I 永井朋生　構成 I 竹岡寛俊　ｻｳﾝﾄﾞﾐｷｻｰ I 高梨智史　ｶﾗﾘｽﾄ I 齋藤直彦

ﾌﾟﾛﾀﾞｸｼｮﾝﾏﾈｰｼﾞｬｰ I 山口佳織　協力 I 奥川地域づくり協議会　製作 I リトルネロフィルムズ

企画開発 I 佐藤恒平　配給 I 走馬灯上映委員会　宣伝・配給協力 I ブライトホースフィルム　ﾃﾞｻﾞｲﾝ I BOOT

【2026 I 日本 I カラー I DCP I 5.1ch I 113 分】 © Itaru Matsui

**12 月 12 日（土）シアター・イメージフォーラムほか全国順次公開予定！**

## コメント

*ふるさとにいると、いろんな声が聞こえてくる。*
*先に逝った人の声だったり、小さいころに聞いた虫や鳥の鳴き声だったりする。ただ、それは自然が豊かで、人々が寄り添って生きる場所でなければならない。*
*過疎が進行し、不便なふるさとになぜ人は帰ろうとするのか。*
*そこには分かち合い笑い合う暮らしの本質があり、死ぬまで生き切ることができる世界があるからではないか。*
*「シャボン玉の中にいるような」美しい情景がここにある。*

**山極壽一**（霊長類学・人類学者）

*繊細で、謎めき、深い。*
*映画的感性に満ちている。*

**カン・ソウォン**

（釜山国際映画祭　ワイド・アングル部門　プログラマー）

## 海外映画祭

『走馬灯』は、アジア最大級の映画祭、釜山国際映画祭のワイド・アングル部門のコンペティションに正式招待されました。「ワイドアングル（Wide Angle）」は、短編映画、ドキュメンタリー、アニメーションなど、通常の劇映画の枠にとらわれない独自の視点（幅広い視野）を持った優秀な実験的インディペンデント作品のための部門です。その中で優れたドキュメンタリー作品を競うコンペティションは、アジアにおけるドキュメンタリー作家の重要な「登竜門」として知られています。

# 物語

## 雪深い東北の村にわずかに息衝く、生の記憶と地霊の声。

## 消えゆく山の民の姿を、圧倒的映像美で綴る――――

## 未来の民話が、いま生まれる。

福島県西会津町奥川。縄文の昔から山と共にあった村が、人口減少の末に消えようとしている。残るのは、生まれ育った 500 人の老人たち。2012 年、そこへひとりの男が帰ってきた。福島第一原発事故の後、居ても立ってもいられなくなって故郷へと向かった男を迎えたのは、今は亡き ばあちゃん と共に育った桜の木だった。

> ***ここ（村を）継げよ。誰にも売んなよ。***
> ***でもここじゃ食っていけねえからなあ。なじょ（どう）する？***

ばあちゃんの声に導かれ、時が止まったような村に男は馴染んでいく。
人の手を離れて荒れた風景から、次第に村人たちの声が聞こえてくる。

> ***ここがいい。ここで死にてえ。***

村人は祭りや山の神への信仰を細々と続けながら、山菜やキノコの採集を楽しみ、獣肉を分けあった記憶を思い起こし、先祖に手を合わせながらやがて来る死を想う。

> ***死んでる人も生きてるから。みんな見守ってくれっから。***

都会の物差しで見れば、不便で厳しい山奥だが、村人にとっては、はるか昔から先祖たちが生まれて死んできた命の揺籠だ。ここで人はキノコのように土と繋がり、死者と繋がり、命の終わりには親しんだ風景に消えていく。現代社会の忘れかけている生まれた場所で死ぬ喜びを男は発見する。

世界人口の 6 割が都市に住むという未曾有の段階を迎えた現代社会の周縁で、無数の集落が消滅の運命を辿る。映画は日本の地方だけでなく、全世界の消えゆく故郷を念頭に記録され、「人が心から帰りたいと願う場所とは何か」を希望と共に問いかける。

男は山の神が宿る御神木から新しい家を建て始める。先祖がそうしてきたように。

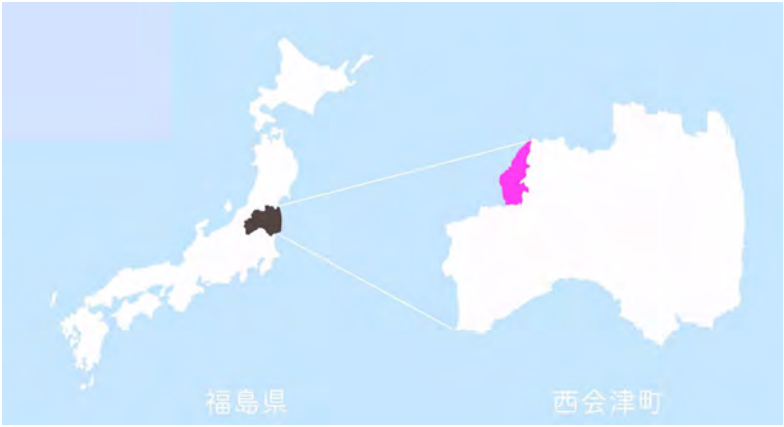
> ***もしこの土地の記憶がなくなったら、故郷は記憶喪失になってしまう――***

ひとりの人が死を前にその人生のすべてをフラッシュバックするように、ひとつの村の消滅を前に、土地の記憶と先祖たちの声が走馬灯のようによみがえる。

監督は『私だけ聴こえる』（令和 4 年度文化庁映画賞大賞）の松井至。本作は、2024 年に西会津奥川の村の人々より依頼を受けた映像作家の松井至が、世界最先端の映画プロデューサーCHARLOTTE COOK と共に制作を開始。1 年を通して撮影された奥川の四季は圧倒的な映像美で五感を呼び覚まし、西会津の水や木や石を楽器にして作られた音が現地にいるかのように響き渡り、本能的なレベルでの「帰郷」の体験をもたらす。

# 映画の舞台

福島県西会津町の５つの地区の最北に、映画の舞台となった奥川地区はある。
奥川は飯豊連峰の山懐に深く抱かれた山あいの郷である。阿賀川支流・奥川の谷筋に沿って、川沿い・谷間・山裾に大小 21 の集落が寄り添うように点在し、町域の 8 割以上を森林が占める。積雪 1〜2m に及ぶ特別豪雪地帯であり、古くは会津盆地と越後（新潟）を結ぶ裏街道の中継地として、人や馬、紙・漆・木材・塩が行き交った土地でもある。縄文の遺跡も遺り、記録の上では 800 年ほど前、鎌倉の世からすでに人が治め暮らしてきた歴史を持つ。だが「地図からも忘れられた村」と呼ばれるほどに辺鄙な場所でもあり、大正期に敷かれたトロッコと水力発電が叶えた一時の近代化の光も長くは続かなかった。1955 年にはおよそ 4000 人いた人口が、2026 年には 500 人を切った。50 歳以下は 30 人未満の限界集落だ。飯豊の峰々を仰ぐ谷あいに、幾世代もの暮らしと記憶が層をなす村に山霧がかかる。まるで時が止まったような風景をいまも変わらず見ることができる。





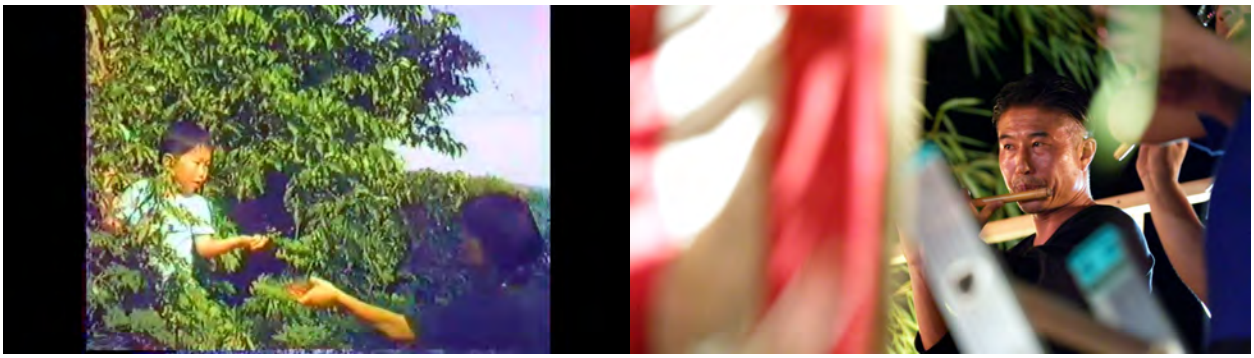




# 地方の現状

いま、全国で奥川のような中山間地が、静かに消えようとしている。2014 年の増田レポートは、若年女性の流出という指標をもとに、全国の自治体の半数近くが将来「消滅可能性」を抱えると告げ、多くの山里に事実上の余命を突きつけた。同レポート内では 2040 年を推計時点として分析、全国 1,799 自治体（当時）のうち、896 自治体（約 49.8%）を「消滅可能性自治体（都市）」としている。奥川でもかつての開拓集落は冬になれば人影を失い、子どもの声が絶えた廃校は朽ちて山に還った。人が退いた田畑や里山には、猪や熊、鹿、猿といった獣が下りてくるようになった。耕作放棄地は獣道となり、人のテリトリーは後退を続けている。そこで失われるのは、人口という数字だけではない。棚田や堰を守ってきた共同性、土地の神へ祈り、生活を作る無数の手仕事、口伝えの唄や昔話――日本という国の基層をなす文化そのものが、担い手を失うたびに消えていく。それは同時に、人の手入れが守ってきた自然との調和が崩れ、受け継がれてきた国土を失うことでもある。過疎とは、ただ人が去ることではない。獣がそっと領域を広げ、幾世代もの記憶の層が誰にも語られぬまま消え、土地が記憶喪失になることである。
安宅和人（慶應義塾大学環境情報学部教授）が提唱する「風の谷」は、こうした疎空間を新しい社会の選択肢として再設計する発想であり、地方を「守る対象」ではなく未来を創る場として捉え直している。牧瀬稔（関東学院大学法学部地域創生学科教授）も、地域づくりは外部依存ではなく、住民主体で地域資源を活かし、住民個々の自治の心が地方創生には重要だと説く。人口減少を前提としながらも、地域固有の価値を磨き、人が誇りを持って暮らし続けられる環境をつくることが、今、中山間地域に求められている。
いま奥川にも都市から移住する人流が生じている。他所からやってきた者が新たに土地と関係を持とうとするとき、村に蓄積された先達の文化は、生存の方法を伝える生きた財産となって未来に受け渡されるに違いない。過疎を嘆くのではなく、いかに自然との関係を再設計するかという希望の視点が問われている。奥川のような山村を未来につなげる試みが全国各地ではじまっている。

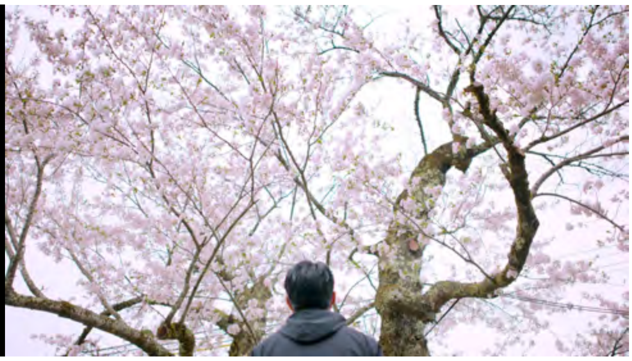
# 登場人物



## 帰ってきた男（アノニマスマン）

この映画の主人公は匿名の男として登場する。
故郷の思い出を持ちつつ、都市に暮らし、あるとき引き戻されるように帰ってくる。
彼は世界中にいるだろう望郷の念を持つ人間の象徴であり、あらゆる損得を捨てて故郷に戻る心情を背負う人物だ。だから映画の中では、事細かに彼の生活を説明することは極力しないようにした。目まぐるしく変化する現代の都市部から奥川に戻り、だんだんと村の時間を思い出しながら変形していく彼は、村の深層へと向かう水先案内人でもある。男は村人の声を聞き、死生観に触れ、最後には自分の役割をまっとうするかのように山の神さまの御神木を削り、未来の村のための家を作りはじめる。

男の本名は矢部佳宏さん（1978 年西会津生まれ）。西会津国際芸術村のディレクターを務め、奥川の地域づくりの中心的役割を担いながら、秘境と呼ばれる橲山（ならやま）集落に暮らしている。幼少期、祖母（幸子ばあちゃん）から「ここ（橲山）は全部おめえのもんだからな」と言われて育つ。大学時代、実家の実測調査をし、どのように先祖たちが奥川で暮らしてきたかを調べる。梁の上を歩いていた時、線香の匂いがして ふっと先祖たちの命の連なりの線上に自分の命があることに気付かされる。橲山は矢部家の先祖が 360 年ほど前に拓いた集落であり、矢部さんは 19 代目の当主であった。卒論では集落論を執筆。その後、カナダの大学でランドスケープデザインを学び、上海で働き、福島第一原発事故を機に帰郷した。西会津での活動が認められ、令和 5 年度ふるさとづくり大賞。

## 幸子ばあちゃんと桜

男の家の前に立つソメイヨシノは、樹齢 100 年を超える。
祖母の＜幸子ばあちゃん＞は、この桜をいちばん可愛がり、一緒に育ってきた。
明るくて声が大きく、山で人を呼ぶ時には「ホウ」と鳥のように叫ぶ人だった。
幸子ばあちゃんは近代化の中で奥川から人が減り、存続が危ぶまれることをわかっていた。だから孫に「ここを守ってな」とよく語った。男にとってそれは忘れてはならない故郷との約束になった。やがて男が村から出て、広く世界で働くようになったある時、親父から電話があり、幸子ばあちゃんの死を知った。その時、男の中で橲山集落の風景が走馬灯のようによみがえり、ばあちゃんの声が聴こえた。そして男は約束を守るため、故郷に帰った。映画では桜の木を幸子ばあちゃんの分身として描いている。




## 百姓の夫婦

山浦集落に暮らす、宮澤一一（かずいち）さんと恭子（やすこ）さん夫婦。 生まれ育った奥川であたりまえに百姓として生きてきた。先祖が残してくれた田んぼで米を育てるが、体力的にも限界が訪れており「もうやめんべ」と呟く。結婚は親が決めたこと、特に恋愛感情はなかったと言いなが

らも、どこへ行くのも夫婦一緒で助け合っている。冬になり、恭子さんが転んで肋骨を骨折。一一さんは施設に入れようとするが恭子さんは「いやだ」と拒み、家に居続ける。春になると辞めるはずだった稲作の準備をしている。自分の農家人生を振り返り「大体が赤字だった」という。「どうして生きてこれたのかなあ」と真面目に考える一一さんは、収支では測れない、自給自足があたりまえであった頃の村の生き方をやりきったことに気付いていない。




## 弥平四郎の女たち

奥川の最北端の山奥にある弥平四郎集落に暮らす小椋サカコさんと 小椋ユアコさんは、いつもふたりで喋りながら手仕事をする。この集落は元々、日本各地を移動しながら木のお椀を作って生計を立てていた山の民・木地師の集落であったことから、狩猟採集に優れ、山菜やナメコ、獣肉を尊ぶ。サカコさんは山からお椀をたくさん背負う仕事をした記憶があり、ユアコさんは手斧でお椀を荒彫りした記憶がある。サカコさんの夫は鉄砲撃ちで、熊狩りの名人だった。熊を撃って帰ると必ず村の人に平等に分けて食べる。山菜やキノコなども同じく平等に分けることが徹底してルールとされ、他のマタギの地域の習俗と同じく原始共産制によって集落を存続させてきたことの名残がある。村は他の奥川の集落から独立しており、負けず嫌いの気質と高い独立心で賑やかだったが、大方の人は喜多方や会津若松などの都市部に引っ越し、現在は十数名の老人たちが暮らしている。ふたりは村を出ていった人たちが弥平四郎を思い出せるように山菜やナメコを採っては送っている。



## 福島屋

奥川唯一の商店・福島屋の店長の荒海享俊さんは、国立大学を卒業後、スーパーで勤務を経て、3代目として店を継いだ。「小さい頃にお世話になった地域の人に恩返しがしたかったから」と言う。人口減少は進み、空き家が増え、食料を届けなければ自分では買い物にいけない老人が増えた。移動販売者は見回りも兼ねている。老人にしてみれば、免許も返納し、福島屋が無ければ施設に入れられるか、息子や娘の家に引き取られることになる。「商売にならないから」と他の商店も

奥川からは手を引いたが、荒海さんは自分の給料を削ってギリギリ店と生活を存続させている。損得を超えたその姿は、奥川に残った老人たちが、ここで最期の時を迎えられるように支えているようにも見える。杖をついて出てきたのは 100 歳を迎える長谷川キノさん。家に食料を届けたのは矢部益子さん。



## 鉄砲撃ち

若い頃から林業で生計を立て、奥川の山をくまなく知り尽くしている矢部隆一さん。昔は鉄砲撃ちたちで集まって狩猟に出かけ、ウサギや熊を食べるのを楽しんだ。いまは山が荒れ、獣のテリトリーが山から里へと広がり、田畑が食い散らかされることから獣害対策として狩猟をしなければならない。里を守る数少ない猟師として隆一さんは若い人にその方法を伝授しながら山を歩く。映画では奥川への若い移住者の萩原謙介さんに指示を出し、巻き狩りを試みる。狩猟の思い出を語る中で、まだ幼い熊の子を撃てなかった話をする。猟師は獣の命を奪い、肉をいただくことの中で、いかに相手を苦しませずに殺すかという倫理を持つ。



## お地蔵様に頭巾を縫う ばあちゃん

９８歳の三瓶トミノさんは集落の入口に立つお地蔵さまに着せるための赤い頭巾と前掛けを年に３度新しく縫い、取り替える。トミノさんのうちは奥川でも貧乏な家庭だった。布が貴重で、ひとり一着を大事に着ていた時代、トミノさんの母が縫ってくれた他所行きの服を今でも思い出す。遊び疲れて眠ると父親がおんぶして寝床まで運んでくれたことを思い出す。貧乏だけれど、愛されて育ったことに感謝している。だから地蔵さまにもせめて新しい綺麗な色の衣を着させてやろうと思う。トミノさんは目がよく見えるため、針の穴に紐を通して、誰の手も借りずに縫いあげる。そし

て頭巾をかぶせると無心で祈る。何かをお願いしたりはしない。無心がそのまま神であるという古来の考えが生きている。



## 亡き友の霊魂に話しかける ばあちゃん

冒頭でスクーターに乗って墓参りにいく矢部タミさん。自分の先祖の墓の掃除が終わると近くに住んでいた友の墓に話しかける。「ミヨちゃん、お墓の中でお元気ですか？」。生きている人に話しかけるのと同じように亡き人にも話しかけることは村の人たちの日常だ。タミさんは働き者で嘘ひとつ言ったことのないような人だが、ミヨちゃんが死んだ夜、家の前の道に火の玉がやってきたのを見たという。火の玉はオレンジに燃え上がり、ミヨちゃんと一緒にいるような気配がして去っていった。次の朝、ミヨちゃんが亡くなったという知らせが入ってきた。タミさんは霊魂が別れを告げにきたのだと思っている。



## 亡き人の服をまとう ばあちゃん

石井アツコさんは毎日必ず仏壇にご飯を供えて手を合わせ、先祖に話しかける。つい数十年前まで日本全国であたりまえにあった風景だが、いまではそれが少数になってしまった。石井さんは親が着ていた服を着る。そうすると見守ってくれるという。逆に先祖への信仰を忘れた人は悪夢を見て眠れなくなり、故郷の墓に呼び出されると信じている。



## 中町の歳の神

小正月（1月15日頃）に日本各地で行われる、正月飾りや書き初めを燃やして無病息災や五穀豊穣を願う伝統的な火祭り。
映画では中町の波田野和信 さんが、「奥川を出たことがない」と打ち明け、岩橋義平さんが「ひとりでもここで死にたい」と語った。

**ディレクターズ・ノート**

# ＜奥川さん＞の方へ

**松井至**

山の神様の祠にはじめて手を合わせた。
おぼろげながら日本人が古来、山を信仰してきたことを知っていたし、これまで旅先で無数の祠をとおり過ぎてきたけれど。石で出来た、ちいさな家の形をした祠に向かって目を瞑ると頭の上でさわさわと葉の擦れる音がした。

**「たまに夢に出るんです。この祠の穴の向こうが知らない街になっていて、**
**木も森も全部破壊されちゃって。怒りで目が醒めるんです。」**

矢部佳宏さんはそんなふうに僕に故郷・奥川の楢山集落を案内した。そのとき彼の悪夢の話とは逆に山の神様は歓迎してくれている気がした。木洩れ陽のまだらな光が優しく撫でるように僕らに落ちてきていた。2023年の春のことだった。
その頃の僕はテレビ局に依存したドキュメンタリーの仕事に疲弊していて、新しい労働の形を作らなければ制作を続けられないと思っていた。大学時代の友人でユニークな地域振興をしていた佐藤恒平に声をかけ、ふたりで「つぎの民話」という映画制作ユニットを立ち上げたばかりだった。地域で撮って、地域で観る。外へ向かうのではなく自分たち自身を観るための鏡のような映像制作はできないか？民話としての映画を作ろう。
そんなコンセプトを面白がって最初に受け入れてくれた先が、西会津の矢部さんだった。彼は奥川地域づくり協議会を発足させたばかりで、映画制作はその初動にぴったりだった。地域にどんな人がどんな考えで暮らしているのか。映像を通して地域の自己像を作る必要があった。制作は捗り、年末には30分のドキュメンタリーを2本手渡した。人口およそ500人の奥川で、120人ほどの村

人を集め、廃校の教室にぎゅうぎゅうになって上映会をした。僕らはこの新しい試みの成功を喜んだ。それで仕事は終わりだと思っていた。

2024 年、奥川地域づくり協議会からさらなる依頼があった。
「好きなように作ってください」と言われたので、老夫婦の恋の短編でも作ろうと思っていた。秋の終わりの、もう明日から寒くなるという日に打ち合わせと称して飲み会をし、気分よく酔ってもう寝ようかと立ち上がると、矢部さんが急に声を詰まらせて言った。

**「もう間に合わないんですよ。**
**最後にメッセージを発しないと奥川は消えてなくなります。」**

咄嗟に「じゃあ矢部さんが主人公になるけど、それでもいいですか？」と返すと「はい」と言うのだった。一緒にいた山口佳織さんが「じゃあ朝からやろう」と仕切らなければ、僕は二日酔いで帰路についていたと思う。次の朝 6 時から楢山の真っ暗な屋根裏で矢部さんのインタビューがはじまった。窓辺に座ってもらうと逆光で柱や梁と同じように黒い影になった人型がこちらを向いた。
顔のわからない誰かが、しゃべりはじめる。
福島第一原発事故が起きた後、海外でそのニュースを見ていて「居ても立っても居られなくなってしまいました」という。
顔のわからない誰かが、ここに戻ってきた理由をしゃべっている。
死んだおばあちゃんに「ここを継げよ 誰にも売んなよ」と言われたという。
矢部さんが顔のわからない誰かであることで、これまで故郷を出て行った無数の人たちの望郷の念が真っ黒い人型になって、目の前でしゃべっていた。

東京に戻ってドキュメンタリーの国際企画会議 TOKYODOCS のワークショップに参加した。講師の映像作家 Jason Hanasik と共に企画のコンセプトを練った。何がしたいのかを問われ、「ひとりの人間がその死に際であらゆる記憶をフラッシュバックするように、ひとつの村の消え際のあらゆる記憶を走馬灯のように見る映画」を作りたいと答えた。走馬灯に近い現象は広く知られており、日本だけではなく世界中で無数の集落が消えていることを彼は教えてくれた。ワークショップの最後に登壇があり、世界各国のプロデューサーや配給の人たちに短い映像を見せて話すと、反響は予想以上だった。

**「映像は懐かしかった」**
**「実は私も村の出身で故郷への感情がわかる」**
**「私の国でも村が無くなっているが、どうすることもできない」**

不思議なことに東京以外の日本を知らない人たちがビルの中で奥川の映像を見て、まるでそこをよく知っているかのように口々に「懐かしい」という。映像には水や火や石や木などの万物を構成する要素の本質を運ぶ力があり、国や文化背景を超えた「懐かしさ」を強烈に喚起することを知った。いくつかのミーティングを経て、CHARLOTTE COOK の机に来た。同い年くらいの彼女が Field of Vision という組織を NY で運営し、世界中のドキュメンタリー作家たちに声をかけ、支援し、映像の新しい文体を創造するという誰にもできないプロデュースをしていることは業界に疎い僕ですら知っていた。そして彼女の方も僕がどんなふうに映像を作ってきたか、よく知っていた。開口一番「あなたと映画を作りたい。何か企画はある？」と言われた。「さっき上映した『走馬灯』をやらない？」と僕は返した。彼女は頷いた。それから制作方法のアイデアをふたつ述べた。

ひとつは、主人公を匿名（アノニマス）にすること。
彼がどんな人かは明かさない。説明はいらない。彼は故郷に帰ってきた男であり、観客は彼と共に故郷を見つけるのだ、と。日本の地方で、普遍的な故郷を撮ることはできる。

もうひとつは、死者から見た人間を描くこと。
僕が「日本では死者が山に登り、見守ってくれていると信じられていた」と話すと、「山から人間を見るようなショットもありうる」と返ってきた。人間以外の視点、つまり死者から生者を見る画を彼女は期待していた。
1時間もない打ち合わせだったが、一気に映画を作りたくなった。

奥川地域づくり協議会にこんな説明をした。
「いま、およそ 500 人が奥川に残っていて、ここで最期を迎えたいと思っていますよね。なぜここで死にたいのか、それを映像にしてみたいです。」こう伝えた後、ちょっと正直過ぎて失礼だったかなと心配したが、「うん。それだな」と、ふたつ返事で返されて逆にこんなにすんなりと決まっていいんだろうかと驚きながらもいまこの手で核心に触れたのだとわかった。

**「松井ってのがそっちゃ行ぐから」**

協議会の会長で大工の武藤道広さんがどんどん人を紹介してくださり、佳織さんに借りた車で家々を回っていく。

**「ここで死にてえ」**

これからどうしたいかを聞くと村の人たちは、なんとも嬉しそうにこう呟くのだ。その表情は希望に突き動かされて夢を語るようであり、「実はね…」と好きな人についての打ち明ける十代のようでもあった。矢部さんはすでにこれについて考えをもっていた。

**「奥川の人はみんなそうですが、死ぬのが怖くないというか、断絶してなくて、**
**むしろ先祖が死んでいった風景に自分も連なっていく感覚なんでしょうね。」**

一本の樹のように生まれた場所で死ぬことが最上の幸福だった時代がつい数十年前まであった。僕らはもうすっかりそんなことを忘れてしまったかのように幸せのようなものを探し求めて忙しく移動しているが、あまりにも速く短く動き回り、帰る場所すら持たないため、土地に根ざすことができない。

ある大雪の朝のこと。
仏壇に手を合わせた老婆が今は亡き夫に向かってこう言った。

**「あんまり雪を降らせないでね」**

このとき死者は雪を降らせる空の上にいる。またあるときは誰もいないのに台所から聞こえる洗い物の音が死者が来ている合図だった。亡くなった友人の霊魂は火の玉になって挨拶に来る。生と死が途切れなく続いている様に驚いていると「死んだ人も生きてるだから」と言うのだった。奥川の風景には、あたりまえに死者が偏在していた。

**「近代以前はどこもこんな感じだったんじゃないですかね。**

**現代は死者のいる風景を失ったんじゃないかと思います。」**

真夜中に矢部さんがそう言った。
彼にとっては家の前の樹齢 100 年を超える桜の木がその象徴だった。
大好きだったばあちゃんが分身のように大切にした桜が花を咲かせる時、その生命力は植物のものであると同時に彼女の霊魂の現れだった。
近代以前とは、村とは何か。風景とは、生まれたところで死ぬとは何か。
その頃の僕らは夜通し、延々とそんな話をした。

新年になって、村の＜歳の神＞に呼んでもらった。どんと焼き、鬼火焚き、道祖神祭などと呼ばれ、日本各地で小正月に行われる行事だが、真っ暗い真夜中に藁を燃やした焚き火の上の真っ白い鏡餅をカメラ越しに凝視すると、ふわふわ宙を舞う餅が村人たちの霊魂のメタファーに見えてきた。餅は霊魂の姿をして「今は人間という複雑な生き物であることを忘れよう。たまたま偶然、地上で寄り集まって一時を過ごしているだけのことなのだ」と語りかけているように思えた。先人たちの発明した、人間を初期化する儀式を見せられている気がした。

それからも不思議なことがたくさん起こった。
「こんな場面が撮りたいなあ」と話せば、ふと雪が止み晴れ間が出て、急いで撮影を終えるとまた雪が降り始めた。カメラを向けた出演者の顔や手にさっと光が射し、降ろすと消えた。撮影と共に風が吹き、止んだ。
僕らはその現象を＜奥川さん＞と呼ぶようになった。
「ああ、今日も奥川さんが撮らせてくれるね」と笑って、感謝をした。風景は無数の霊魂の表情の現れだった。まったく霊感のない自分も、古来、地霊と呼ばれてきたものの存在を感じた。村を回るうちにここで暮らすひとりひとりが奥川に生えたキノコのように思えてきた。地中に菌糸を広げ、条件が揃うと地上に現れ、死んで土に還っていく。

幾度となく奥川と東京を行き来した。
恋のように引き寄せられて、睦合うように撮影した。1年の間、どこにいても山の中を歩いていて体中がうっすら濡れている気がしていた。

弥平四郎で小椋サカコさんが仏壇に話しかけるシーンを撮った時、その相手が死んだ夫や子どもだとわかっていながらも、この飾り気のない祈りは本当に時空間を超えて、どこか遠くで助けを必要とする人たちの苦しみをやわらげ、この世界が壊れないようにそっと支えているのではないかと思った。僕たちがこの滅茶苦茶な世界でかろうじて狂わずにいられて、笑い合って生きていけるのは、もしかしたら見ず知らずの無数の誰かが無心で祈っているからなのではないか。だとしたら世界中から奥川のような村が失われているという事実は、無心で祈る人が失われていることであり、その知られざる無数の祈りでかろうじて保たれていた世界はいま均衡を崩し、癒しようのない苦しみに悶えて滅びようとしているのかもしれなかった。

最後の撮影の時がやってきた。
春になり、矢部さんの家の前の桜に花が咲いた。何日も曇天無風が続いていたが、僕が訪れるとにわかに風が吹き出して、晴れ間が出た。満開の桜に梯子をかけて、花吹雪越しに見た矢部さんは、ばあちゃんそっくりだった。ばあちゃんが矢部さんの体を借りて桜を見上げていると思えるほどよく似ていた。あの原発事故の後、居ても立っても居られずに故郷に帰った男は、先祖の顔になって縁側に座っていた。

カメラを降ろすと空は曇り、風が止んだ。
楢山を出ようとして車のエンジンをかけたが、突然、事切れてもう二度と動かなかった。

＜奥川さん＞が来たのだ。

その頃の僕らはあたりまえにそう思っていた。



# 映像の地産地消　つぎの民話の試み

「つぎの民話」は＜地域で撮って、地域で観る＞をコンセプトに、地方に暮らす人々の暮らしや挑戦を 30 分前後の短編ドキュメンタリーとして制作し、上映後の対話までを一体のプログラムとして設計した映像プロジェクトです。
走馬灯の監督である松井至と、企画開発担当の佐藤恒平が 2 人組ユニットで、映画を使った地域振興企画として 2023 年より活動をはじめました。作品を完成させること自体を目的とするのではなく、地域の人々が同じひとつの映像を見て語り合い、自分たちの地域の未来を考えるきっかけを生み出す「映像の地産地消」目指しています。
2023 年に第 1 作として、福島県西会津町で「奥川・未来の結」と「田んぼに還る」の 2 作を制作。2023 年 12 月に行われた上映会には 500 人の地区から 150 名以上が来客。鑑賞しただけでなく、映画の題材となった地域振興活動に参加してくれる地域が 6 倍に増えるなど、地元の心を動かす実績となりました。
その後も、群馬県前橋市、山梨県北杜市、青森県田子町とつぎの民話は制作を続けています。映画の上映権利を地元の関係団体にも分与し、地域内で無料で自由に上映できるだけでなく、地域外での上映収益は制作チームと地域団体で分配することで、映像を通した、地域への継続的な利益を還元するモデルも実践しています。
自治体や大学での教材・研修にも活用され、2025 年には東北大学で開催された国際教育開発フォーラム（IEDF2025）で上映され、海外ではモスクワの国際交流基金の日本語教室でも上映されています。2026 年 2 月からは共同通信配信記事として 10 都道府県以上の地方紙に掲載されるなど、地域づくりにおける新たな映像活用事例として注目を集めました。




また、2025 年には監督・松井至による書籍『つぎの民話―〈映像以前の光〉への旅』（信陽堂）が刊行され、映像制作の思想や全国各地での実践が一冊にまとめられました。前作『私だけ聴こえる』（2022 年公開）からの 2 年間の映像制作の探究がロードムービーのように記されており、「つぎの民話」プロジェクト発足のきっかけとなるアフリカのエピソードや、西会津を訪れて短編を制作した経験もあり、映画『走馬灯』にいたるまでの足跡がわかります。
（ここから試し読みができます。）「握手」 https://shinyodo.net/diary/2010/ ）

こうした活動を受け、第 1 作を制作した西会津町の奥川地域づくり協議会から、「次回作もこの地で撮ってほしい」という再制作の依頼を受けます。映画とは無縁だった過疎地域に、制作と上映を経て信頼関係が築かれ、新作ドキュメンタリー映画『走馬灯』は生まれました。本作は地域から与えられたテーマではなく、地域が信じた作家の視点を活かし、相互の尽力で制作された「つぎの民話」の新たな展開となっています。（文・佐藤）



## 西会津産の音楽

音楽は国内外で活躍するパーカッショニストであり音楽家の永井朋生による。
「走馬灯」の音楽は全て西会津で出会った素材を楽器にして、作曲・演奏された。地元の特産品である桐の木琴、神社の石は擦って音を出し、楮の枝はくり抜いて笛を作った。使われなくなった農具、茶碗、古くなった家財道具、竹、灌漑用水の流れる音など、かつて生活の一部であった素材が音を奏で、素朴でありながら深い表情を持つ音楽を生み出してくれた。





これらの音が、心豊かで人間味あふれる西会津の人々の暮らしを捉えた映像と、とてもよく合っていることに驚く。音楽を通して、この地域の澄み切った、穏やかで優しく、静かに豊かに息づく風土を伝えたいと思い、この非効率的な作曲方法をとった。
またピアニストの平林牧子さんと結成したバンド「Osmo」の楽曲は西会津の小野本講堂でレコーディングされた。地域住民や BOOT（矢部佳宏氏のデザイン事務所）の多大なる支援を得て制作され、講堂の響きから生まれたその音楽は「西会津」そのものとのコラボレーション作品として映画に登場している。（文・永井）

## 届けたい人

制作の最中、何度となく完成後の映画館を想像した。
暗闇の中、上映中であるにも関わらず、おもむろに席を立ち、劇場を出る人のことを。
「もう故郷には帰らない」と決めて都会にやってきて、家族を持ち、家を建て、なるべく故郷のことを考えずに暮らしている多くの人にとって、この映画に映し出された村の人を見ることは、自分が捨てた風景を見ることに他ならないだろう。

僕の父（70 代）に、この映画の話をしたことがあった。
すでに彼の両親は亡くなっているので、同時に彼は故郷に帰る理由もなくなっていたのだが、いまだに「故郷に罪悪感がある」という。心のどこかで「自分がそこに残って、支える側にいなければならなかった」と思うようだ。しかし「故郷に居場所がない」こともわかっていた。生み育ててくれた場所への深い愛と、他にどうすることもできなかった別れ。活況を失っていく町を遠くから眺めていた長い時間。こうした人は僕にとっては、故郷への愛憎を持ち続けることができたという点で幸福に思える。痛みを伴ったとしても、映画を見てもらえたらと思う。

そんな彼らの子どもが都市で生まれた。1984 年東京生まれの僕は、故郷という感覚がない。東京は変化が激しく、子どもの頃の思い出深い市場や通りは、もう別の場所になってしまった。生まれながらに故郷を喪失している人が大勢いる。それがあたりまえという人もいれば、欠乏感を抱く人もいる。語感がおかしいと思われるかもしれないけれど、「ふるさとが欲しい」「ふるさとを探したい」という渇望のようなものが、自分にはある。このような映画を作ることになった、感性の前景のようなものだ。そういうこともあって、僕は自分のような故郷喪失者にも、この映画を届けたいと思う。

今の 20〜30 代は、また異なる。インターネットで情報が均等になった分、都市部に住む必要も薄まり、地方に新しい居場所を求める移住者が少なからずいる。そういう人にとって、この映画は未来への一歩を踏み出す物語になりうる。

そして出演者たちのような地方の集落に住む古老であれば、映画の抽象性などものともせずに大いに笑いながら受け取ってくれるだろう。映画館だけでなく、各地に出向いて、村の集会所や廃校での上映もしていきたい。

もうひとつ、この時代にこの映画を作った理由がある。
いま、政府や企業による個人情報の利活用拡大や AI・監視技術の社会実装が急速に進み、便利さと引き換えに、人がデータとして管理される感覚がじわじわと強まっている。長期にわたる経済的停滞と先行きの見えない不安のなかで、国籍、性別、肩書き、障害の有無といった属性で人を値踏みする空気が広がり、マウント、差別、冷笑が驚くほど身近なものになりつつある。そうした社会の分断や不安に乗じるようにして、「日本」というアイデンティティが本来の意味を離れ、ナショナリズムを刺激し排外的な熱狂を煽る道具として利用される場面が増えているようにも見える。

そんな「日本」ではなく、めちゃくちゃに変化していく街のことでもなく、生命として還るべき故郷とはどういう場所かを僕は思い出さなければならなかった。
奥川を写しながら、僕はそのひとつの在り方を見せてもらった気がする。
もし日本的な感性というものがあるとすれば、国家以前、文明以前に、山の民であり、川の民であり、海の民として土地に根差してきた暮らしの中にその原点があるはずだろう。
未来を生きる人に、この映像でできた民話を手渡したい。

（文・松井）

## 制作陣

**松井至 | 監督・演出・撮影・編集**
1984 年生まれ。人と世界と映像の関係を模索している。
2022 年、耳の聴こえない親を持つ、聴こえる子どもたちが音のない世界と聴こえる世界のあいだで居場所を探す映画『私だけ聴こえる』を公開。海外の映画祭や全国およそ 40 館のミニシアターで上映され反響を呼んだ。2025 年、体験的映像論『つぎの民話』を刊行。
Hot Docs 2021 正式招待。DocEdge Film Festival 2022 Best Sound Award。
2022 年文化庁映画賞記録映画部門大賞。

CHARLOTTE COOK | プロデューサー
映画作家主導のビジュアル・ジャーナリズム・プロジェクト Field of Vision の代表を務める。世界各地で起きている出来事や、継続的な取材が必要なテーマを扱う映画監督やアーティストに制作を委嘱し、その創作活動を支援。北米最大のドキュメンタリー映画祭である Hot Docs のプログラミング・ディレクター、ロンドンの The Frontline Club の映画プログラミング責任者、CPH:DOX と エディンバラ国際映画祭 のプログラマーを歴任。さらに、長編映画 『Our New President』、『The Proposal』、『The Gospel of Eureka』のプロデューサーを務めたほか、短編ドキュメンタリー 『Do Not Split』 のプロデューサーとして、アカデミー賞短編ドキュメンタリー部門にノミネートされた。

**音楽 | 永井朋生**
東京芸術大学大学院修了。世界各地で出会った素材から音を見つけ、自ら楽器から制作。独自のコンセプトに基づいて、ソロやバンドでの国内外ライブ活動および、TV、映画のサントラ制作をする。三保松原文化創造センター「オトノキ」、南方熊楠記念館、「南方熊楠音楽」、JR きのくに線の 31 駅のホームの音楽「Sounds for 31 Stations」、天王洲アイルセントラルタワービル内の音楽等の公共施設空間の音のデザインも多く手がける。スター・ウォーズ：ビジョンズ』Volume 3（2025 年）の音楽でパーカッションを担当。音響彫刻『Kinon』の旅プロジェクト 監修・楽器制作・作曲。

**構成 | 竹岡寛俊**
1984 年、大阪生まれ。2010 年にジョージアのパンキシ渓谷に住むチェチェン系ジョージア人、キストの人々に出会いドキュメンタリー制作を始める。2014 年、キストの暮らしを追ったドキュメンタリー番組で ATP 賞優秀新人賞。2019 年、シリアで息子を失った母たちの姿を追った番組で ATP 賞ドキュメンタリー部門最優秀賞を受賞。2023 年“アダミアニ祈りの谷”を劇場公開。

**サウンドミキサー　髙梨 智史**
1984 年 宮城県生まれ。株式会社 HIGHPAIR 代表。AMI 株式会社 顧問。東京・渋谷を拠点とするポストプロダクション、株式会社 HIGHPAIR の代表を務める。
創造的な整音・サウンドミックスを得意とし、松井至監督作品をはじめ、映画・テレビ番組・広告・Web コンテンツなど幅広い映像作品の音響を手がける。
〈代表作〉
映画『私だけ聴こえる』　— Doc Edge Film Festival 2022 Best Sound Award
Mrs. GREEN APPLE presents『CEREMONY』2026
NHK『いないいないばあっ！』『100 カメ』　VOGUE JAPAN YouTube

**カラリスト 齋藤直彦**
株式会社ヨコシネディーアイエー
2004 年入社後テレシネ業務に従事し、フィルムアーカイブ、旧作映画のリマスターを担当する。現在は、ドキュメンタリー映画やＢＳ４Ｋ・８Ｋ番組などを担当。松井至監督「私だけ聴こえる」、池谷薫監督「先祖になる」「ルンタ」など。JPPA AWARDS 2024 映像技術部門 グレーディング「優秀賞」受賞。

**問い合わせ**
**配給 ：走馬灯上映委員会**
**TEL:070-4132-6157 / MAIL:soumatou2026@gmail.com**
**〒142-0042 東京都品川区豊町 1-18-4 ゆたかビル 2B**
**リトルネロフィルムズ　松井至**

**宣伝：ブライトホース・フィルム（岩井）**
**TEL:090-7270-0423 / MAIL:iwai@brighthorse-film.com**